

## ドイツフェアに参加して

海老名ドイツ語OB会 岡部 正忠

心地よい潮風が頬をかすめる夕べ、ドイツビール、ドイツ料理とドイツ音楽を楽しむことが出来ました。この度、海老名から3名が参加しました。なぜ、海老名から参加したか？そのいきさつを述べます。昨年11月に海老名市公民館主催の「初めてのドイツ語・ドイツ生活あれこれ」というテーマで、ドイツ語講座が開催されました。講師は宮下 啓三先生とそのアシスタントは伊藤 志津子さんです。募集定員20名のところ26名の応募がありました。私は、26名の応募者が、どんな理由で受講するのか興味を持ちました。私については、大学でドイツ語を専攻し、卒業後、仕事でスイスのチューリッヒに駐在しました。チューリッヒはドイツ語圏なので、ドイツ語との関わりはありました。他の受講者に、ドイツ語との関わりについて聞いた所、昔、仕事や旅行でドイツへ行った。ドイツ音楽や文学が好きだ。ドイツに友人がいる。この機会にドイツ語を勉強したい等とのことです。私は26名の受講者は日が経つにつれて、減っていくのではないかと思いますでしたが、何と、全員が最後まで受講しました。これは、宮下先生の教え方と伊藤さんのアシストのお陰です。宮下先生は、受講者の立場で、受講者のレベルに合わせて、教えられたこと、また、広い視野から、分かりやすく、お話されたことです。アシスタントの伊藤さんは、実際に、スイスやドイツでの生活体験から、料理や住居をはじめ、ドイツ生活あれこれをお話されました。ドイツ語講座終了後、海老名の地に、折角、灯ったドイツの火を消してしまうのは惜しいという事で、11名の有志が海老名ドイツ語OB会を結成し、サークル名を **Der Deutsche Ring** として、宮下先生にお願いして、4月から月1回のペースで再スタートしました。この度、宮下先生のお誘いでドイツフェアに参加出来、大変感動し、ほろ酔い気分、湘南の「風」を背に受け、海老名へ帰りました。

## 湘南日独協会2006年度活動予定

■次回の会員懇話会はドイツから来日中の「ジルヒャー合唱団」と湘南日独協会合唱団「アムゼル」の交流会に当てることとなりました。参加ドイツ人は男性28名、女性はピアニストとフルート奏者を含めて14名となっています。ドイツ人と直接交流する絶好の機会でもありますので、どうぞご参加下さい。

日時 11月1日(水) 15:00～17:00

会場 藤沢市民会館第2展示ホール

会費 1500円(17:30～懇親会3000円希望者のみ)

■11月13日(日)10:30～15:00

かまくら国際交流フェスティバル2006

会場 高德院(鎌倉大仏境内)湘南日独協会も参加。

■11月25日(土)13:30～16:30

第48回例会 講演会

演題 「タミーノの日本の狩衣」

…モーツァルトは日本について何を知っていたのか  
モーツァルト生誕250年にちなむ耳寄りなお話を伺うことになりました。

講師 ヨーゼフ・クライナー氏

(ボン大学教授・日本研究家)

会場 湘南アカデミアサロン

会費 会員 1,000円 一般 1,500円

■望年会

12月未定日(?)18:00～

会場 未定 会費 未定

湘南日独協会会報(Der Wind)

VOL. 8. NO. 5. 通巻47. 発行 2006. 9. 30.

## 湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1

江ノ電第2ビル7F

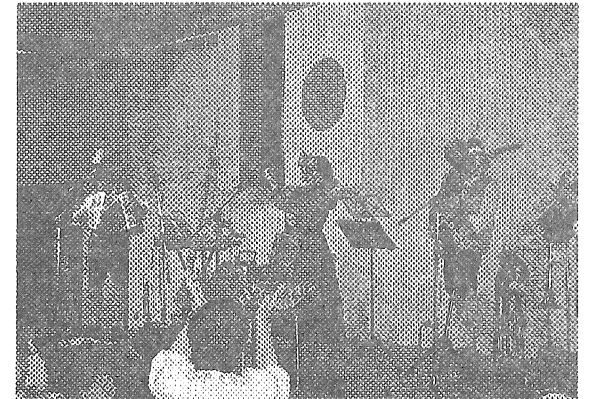
TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

湘南日独協会 会報

# Der Wind

(風)

今年も賑やかに **ドイツフェア** 開催



湘南の夏の恒例行事となったビアイベント「ドイツフェア」が今年も賑やかに開かれました。湘南日独協会の合唱団「アムゼル」と楽団エーデルワイスカベレの演奏で会場はドイツムードに包まれたひとときでした。今回は海老名から3名の方が参加されました。その中の岡部正忠氏が当日の感想を会報にお寄せ下さいましたのでどうぞご覧下さい。

【バルトの楽園】裏面に会員の廣川貴男氏が映画「バルトの楽園」への想いを綴って頂きました。

★★★★★★★★★★★★★★★★

新入会員紹介(8月1日現在・敬称略・順不同)

宮原シヅ 奥村義道 奥村たまき 林崎 澄  
中川好夫

# 映画『バルトの楽園』を観て

会員 廣川貴男

因縁といえど因縁、牽強附会の嫌いはあるが、この映画に言い知れぬ感慨を覚えたのは故なきことではない。板東俘虜収容所（現・徳島県鳴門市）の所内で、往時ドイツ人捕虜が、週刊で発行していた新聞“Die Baracke”の日本語版制作に、僅か乍ら関わっていたからである。手書きによる髭文字筆記体（ジュッテルリン書体）の新聞のコピーを前に悪戦苦闘した数年前の日々が懐しく想い出された。更に付言すれば、収容所長の松江豊寿・陸軍中佐（大正6年8月大佐に昇進）である。會津藩士を父とし明治5年（1872）會津若松に生まれた松江は、賊軍の子の宿命を負って幼少年時代、辛酸を嘗める。吾が祖もまた、奥州白河の一藩士として、戊辰戦争の敗北と、それに続く逼塞と零落の苦海に身を置いている。これが“因縁”なる言辞を弄する所以である。

まこと迂闊であったのだが、『バルトの楽園』を“Baltのラクエン(Paradies)”と訓んでいたところ、“Bart(Kaiser bart)のガクエン(Musikalisches Elysium)”であることに気付かされた。バルトは松江所長のカイゼル髭を、ガクエンは収容所内の音楽的空間を指すものであろう。2時間余りの映画は、全編これ感に耐えず、涙腺は緩みっぱなしであった。諸処に史実を逸脱して浪花節調に傾く描写がある。が、こうした瑕瑾はあるものの、それを捕ってなお余りある珠玉が鑲められている。戦場で干戈を交えた日独双方の将兵、そして阿波の寒村・板東の民衆が収容所を核に、国境・民族を超えて深い友愛の情で結ばれていく有り様は、シラーやベートーヴェンならずとも頌歌・讃仰止み難いものである。“alle Menschen werden Brüder, wo dein sanfter Flügel weilt”そのままに、Menschenliebeという理念の結実を巧みに描ききった良質の映画といえるであろう。

第一次世界大戦（大正3～7年1914～18）が勃発



するや、ドイツの東洋に於ける根拠地・山東半島の青島は、久留米の第18師団を主力とする日本軍約28000の兵力に攻撃される。ドイツ側守備軍はワイエル・ワルディック総督以下5000足らずの兵力であり、その三分の二は東アジア各地から急ぎ召集した民間人の義勇兵である。2ヶ月余りの攻防戦の後、日本軍に降ったドイツ人捕虜は総数約4600。大正3年10月から12月にかけて、九州、四国、本州12箇所の俘虜収容所に分散収容されることになる。久留米では地元の師団が青島攻撃の主力でもあり、多くの戦死者を出したこともあって、当地の収容所に入った捕虜の待遇は劣悪であったようだ。収容所長が、後年、二・二六事件で悪名を残す眞崎甚三郎少佐であったことも禍いしたものか。それにひきかえ板東の地は、四国八十八箇所第一の札所・靈山寺あり、阿波国一之宮・大麻比古神社あり、地元民は巡礼・客人（まろうど）を篤く遇する土地柄である。大正6年、収容所は6箇所に統廃合され、この年新設された板東の収容所には1000人以上の捕虜が移送されて来る。その内訳をみると、下士官以上の陸海軍人は1割足らずで、他は農民、職人、工場労働者、商人、官吏…と、種々雑多である。板東俘虜収容所内は宛ら『Die Meistersinger von Nürnberg』の世界であった。靴、パン、菓子、ハム・ソーセージ、ピール等を作る職人を始め、印刷工、石工、鍛冶、音楽家、教師等々、多士済々である。ドイツならではの言うべきか、さすがドイツと言うべき

か、収容所内にはベートーヴェンの『第九』や『第五』、『第一』シンフォニーを日本で初演したことで知られるMAK（沿岸砲兵隊）オーケストラ（45名編成）の他、エンゲル・オーケストラ（45名）、ジュルツ・オーケストラ（吹奏楽・60名）、モルトレヒト合唱団（60名）等、七つもの楽団があったのである。『第九』ばかりが強調されるが、収容所内外で演奏された曲目は、ヴァーグナー、シューベルト、モーツァルト、ヨハン・シュトラウス、ベルリオーズ、プッチーニ…と広汎にわたっている。芸術の領域に留まらず様々な技術・職能を持ったドイツ人捕虜達は、松江所長の計らいで地元民との交流を通じ、持てる技を伝播させていく。降人としての悲哀を知る松江の人となりを抜きにしては考えられぬことである。捕虜の内では最高位のブルーノ・ガンツ演ずるワルディック提督の個室を、松江が独り訪ねるシーンがある。壁に掲げられたドイツ皇帝ヴィルヘルムⅡ世の肖像写真が辺りを睥睨している。故国ドイツの敗戦を知った提督は、手廻し蓄音機のレコードから流れる或る合唱曲に悄然、黙して聴き入っている。松江は歌の意味を解しかね提督に尋ねる。が、返事はない。かすれがちの擦過音の中から囚人連の嗟嘆・愁訴が漏れてくる。“O Himmel, Rettung, welch ein Glück O Freiheit, O Freiheit, kehrst du zurück, kehrst du zurück?” 提督は吾が身の不運に重ね合わせ、凝咽していたのであろう。が、果して松江に伝心したか？また、我々観客はここから如何なるメッセージを観取し掬したか？ライト・モチーフの如く、通奏低音の如く、この映画にはベートーヴェンが底流している。虜囚と高邁なる理想…これほどベートーヴェン好みの取り合わせは他にあるまい。私が監督なら、『弦楽四重奏曲第15番イ短調op132』で締め括るのだが。

私の書架には板東俘虜収容所関係の書が文芸作品も含め少なからずある。その中から特にお薦めしたいのは、中村彰彦著『二つの山河』（文芸春秋社）である。短編ながら佳品である。